

Book Review

評者：三苫里香 熊本大学大学院生命科学研究部 看護実践開発講座

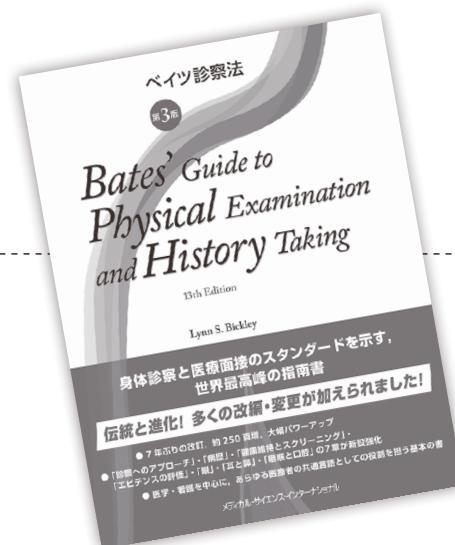
ベイツ診察法 第3版

Bates' Guide to Physical Examination and History Taking, 13th Edition

原著：Lynn S. Bickley・Peter G. Szilagy・Richard M. Hoffman

日本語版監修：有岡宏子・井部俊子・山内豊明／発行：MEDSi

定価：12100円（本体11000円＋税10%）



多職種連携における共通言語として

『ベイツ診察法』は、40年以上にわたり継続的に改訂が続けられ、医師、看護師をはじめとした医療専門職をめざす学生や、効果的、安全、かつ効率的に臨床における患者とのやりとりを学ぶ人々にとって、唯一無二の権威ある情報源であり続けている。

このたび7年ぶりの改訂として、原著第13版の日本語版第3版が出版された。UNIT Iには健康アセスメントの基礎、UNIT IIには部位別の診察、UNIT IIIには特定の集団（小児、妊娠女性、老年）の診察が書かれている。

診察の各章では、診察に必要とされる解剖と生理の基礎知識が説明され、病歴の一般的なアプローチ、身体診察の一般的なアプローチ、診察の技術、所見の記録の順で説明されており、実際に患者の病歴聴取と身体診察を実施することを想定して学ぶことができるようになっている。解剖生理、病歴聴取、身体診察の説明には異常例が右欄に示され、章末には異常な症状に関する原因などが表にまとめられていて、患者の情報から推論しやすい構成になっている。

UNIT Iには、新たに「診察へのアプローチ」「病歴」「健康維持とスクリーニング」「エビデンスの評価」が追加された。五感を用いた身体診察と医療面接の臨床技能を用いて情報収集する場合には、医療者主導のアプローチだけでは、患者の問題を理解し、解決する糸

口となる情報が引き出されないということが起こりうる。学んだ技能を有効に活用するための適切なアプローチの方法として新たな項目が追加されているため、本書を読んで学んだ技能を実践することだけにとらわれず、患者とラポールを構築することの重要性を理解してほしい。

『ベイツ診察法』と出会ったのは、日本の看護基礎教育課程にフィジカルアセスメントを導入するにあたって、米国におもむき看護分野の学部・大学院教育の研修を実施した、20年以上前のことになる。看護に医師が行う身体診察が必要なのか、という議論が行われた時期である。今ではフィジカルアセスメントは看護師にとって必要不可欠な技能であることは明白であり、看護基礎教育課程においても重要な位置づけとなっている。日本における医療の状況や医療専門職の役割が変化し、医療専門職の多職種連携が必要な場面が増えている。多職種連携においては、各専門職の役割を知っておくことは当然であるが、各専門職が用いる言語を理解できることが求められる。多職種連携・協働の観点からも、患者について話し合うために必要な共通言語が示されている本書が医療専門職に広く読まれることを願っている。